

NORITAKE MUSEUM



技法 は 技宝

[開催期間]

2017年 9月5日(火) ~ 2018年 9月2日(日)

ノリタケ食器の技と術

ノリタケはこれまで、古来より陶磁器の製造に用いられてきた伝統技法をはじめ、量産化を図るために従来の技法を改良したものと新たに編み出したものなど、様々な技法を駆使し、多くの製品を世に送り出してきました。

技法の改良や開発により、効率的な量産を可能とし、多彩なデザインを生み出すことができるようになりました。そこには、常に人々の暮らしを見つめ、確かな品質と時代の先端をいく感性豊かな製品を追求する、ものづくりの精神がありました。

本展では、ノリタケ食器の画付技法についてご紹介します。ノリタケが培ってきた、宝ともいえる技の数々をぜひご堪能下さい。

クラフトセンター入館料

大人及び学生	500円	(団体割引有り)
高校生	300円	(団体割引有り)
中学生以下の方	無料	
障がい者手帳をお持ちの方、 65歳以上の方は証明書の提示により	無料	

ノリタケの森クラフトセンター内
ノリタケミュージアム (開館時間10時~17時)
〒451-8501 名古屋市西区則武新町三丁目1番36号
TEL052-561-7114【代】 FAX052-561-7276
交 通 : 地下鉄東山線「亀島」駅下車2番出口より徒歩5分
JR名古屋駅~徒歩15分、名鉄栄生駅~徒歩15分
駐 車 場 : 有り
ホームページ : <http://www.noritake.co.jp/mori/>
休 館 日 : 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌平日)、年末年始

【金加飾】

金液(金に有機物を混ぜて酸性の液体で溶いたもの)や金転写などで加飾して、焼成すること。

■描き起こし

金を手作業で塗り、模様を加飾する技法。作業には熟練した技能を必要とする。

■金の転写化 [1950年頃]

金転写はペースト状の金を用い、転写紙にスクリーン印刷したもの。戦後すぐに開発を始め、1950年頃にはほぼ量産化が可能となった。1961年にはオフセット印刷との併用に成功し、色と金で複雑に構成されたデザインの製品化も可能となった。



■金転写の上の印刷

金転写の上に色を印刷する方法。印刷、発色できる色には限りがある。



■金上白(きんじょうしろ) [1960年代]

金液を塗り、焼成した上に転写紙で白い模様を施す。



■金の上のゴム印画付

金液で加飾、焼成した上にゴム印で黒や茶色といった濃い色を用い、模様を施す方法。



■ゴム印画付 [1893年]

ゴム印に絵具や金液を写し取り、スタンプを押すように模様をつける方法。絵具または金液をガラス板に取り、ローラーでのばしてスタンプ台として使用する。



■スポンジ印画付

スポンジで作ったスタンプに絵具を含ませ画付けをする方法。結晶釉効果のある絵具を用い、本窯シンクインで画付けすると独特の効果が得られる。カジュアルな食器に使われた。



■金腐らし(きんくさらし) [1990年代半ばまで]

生地の釉薬面を腐食(エッチング)し、凹状に模様を彫る方法を「腐らし」という。腐食させたくない部分は保護膜(アスファルト)で覆い、フッ化水素の溶液に浸して釉薬面を腐食させる。その後、保護膜を取り除き、金液で加飾、焼成する。



■サンドブラスト [1970年代]

生地の釉薬面に砥材を強く吹きつけ、「腐らし」と同様の効果を出す方法。「腐らし」に使用するフッ化水素の溶液は劇薬のため、作業者の安全を考慮し、現在はこの方法に置き換わっている。

■金下盛(きんしたもり)

盛上用の絵具で凸状に模様を施し、焼成後に金で加飾する技法。艶のない金下マット絵具との併用でツートーンになる。



■シンクイン金 [1979年]

高温に耐えられる金転写を使い、シンクイン画付で焼成する方法。シンクイン画付の特性により金部分が傷つきにくいため、当初は耐摩耗性が求められる業務用食器に採用された。



■結晶釉効果のある絵具・転写紙 [1970年代]

肉眼で確認できる大きさの結晶が入った釉薬を結晶釉という。結晶釉は焼成後の結晶の現れ方や発色をコントロールすることが難しい。この結晶釉の効果を量産化するため絵具を開発した。



【盛上】

盛上絵の具を模様や半球状に盛り上げて装飾する技法。

■手差盛

筆や竹串、イチチンなどを使って手作業で盛上を施す。

■半球盛 [1980年代]

特殊な器具を使って、ひとつひとつ手作業で同じ大きさになるように半球状の盛上を施す技法。



■シンクイン白盛 [1976年]

白盛をシンクイン画付けたもの。画柄に立体感と深みを出すとともに、シンクインさせることで画柄が傷つきにくい。



■凹み転写(へこみてんしゃ) [1987年]

画柄の一部を釉薬に深く沈み込ませる転写画付けの技法。絵具に特殊な材料を混ぜて転写紙を印刷し、シンクイン画付けすると、画柄の一部が釉薬に不規則に沈み込み味を生む。白盛技法との組み合わせるとより凹凸効果が高まる。



■白盛

盛上絵具を用いて凸状に模様を呈するノリタケを代表する技法。銅版印刷による単体使いから、スクリーン印刷化した。

■銅版印刷による白盛 [1950年]

凹版印刷の特性を活かし、エッチングを施した銅版を用いて、白盛転写紙の印刷に成功した。



■スクリーン印刷による白盛 [1957年]

スクリーン印刷とは、メッシュ(網)のある布地を版枠に張り、網目を目止めることでインクを通す部分と通さない部分を作り、印刷する方法。この方法に適した白盛絵具の開発と製版技術の工夫により印刷に成功した。これにより白盛とオフセットの多色印刷の併用が可能となり、多様な表現ができるようになった。



※オフセット印刷:平版印刷のこと。ニスで転写専用紙に模様を印刷し、そこへ陶磁器用の粉末絵具を蒔くことで画柄を呈する。

■超厚盛 [1996年]

厚盛とは盛上を転写化した技法。通常の約2倍の厚みのものを「超厚盛」と呼ぶ。



画付焼成の種類

上画付(うわえつけ)

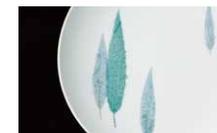
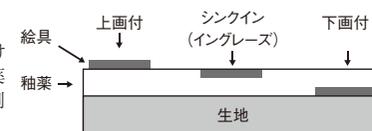
下画付(したえつけ)

シンクイン(イングレース)画付

釉薬をかけ焼成した白生地の上に画付けし、釉薬の融点に近い高温で焼成して釉薬の中に画柄を沈み込ませる方法。画柄が剥げたり、洗剤等に侵されない特性がある。

本窯シンクイン

釉薬を施した上に画を付け、本焼と同時に画付焼成を行う方法。画柄が釉薬となじむことで独特の雰囲気が生まれた。シンクイン画付の特性を併せ持つ。



■転写紙とは

陶磁器用絵具を印刷したシート状のもの。ノリタケでは大正時代に多色印刷の研究開発が始まり、台紙と薄紙を貼り合わせた紙に印刷する「複式転写紙」の自社生産が可能となった。1950年には「単紙式スリップオフ転写紙」が開発されて、生産効率が大幅に向上した。現在の転写画付けの主流となっている。

..... 併用して使う 併用すると効果が高まる

■マイカ転写 [1985年]

細かい雲母(マイカ)の粒子を、ガラスで溶着したラメ光沢のある絵具を用いて、印刷した転写紙。当初は金・銀の代用品として開発されたが、現在ではさまざまな色合いの発色が可能となっている。



■ノリタケ辰砂(しんしゃ) [1960年代]

ノリタケ辰砂は、釉薬と銅化合物を専用の窯で反応させ、深紅色に発色させる技法。わずかな釉薬の膜厚差や焼成温度で、全く別の色になってしまうほど繊細で高度な技術と技能を要する。



■エンゴベ(エンゴベ)

エンゴベは化粧土のことで、ノリタケでは生地表面に色調を作るために用いられる。素焼きした生地の白く残したい部分に撥水剤を塗り、浸しがけや吹き付け、手描きによりエンゴベで色を施す。



■吹き画付

スプレーを用いて彩色する技法。広い面積や曲面部分に色をつける際に用いられる。焼成後の発色の濃淡差をなくし、色を揃えることは熟練を要する。



■刷毛塗

刷毛を使い手塗りで彩色する技法。主に淡い色合いをベタ塗りしたい時に用いられる。



※解説には、ノリタケ社内で使われる独自の用語が含まれている。 ※年代は、開発年あるいはノリタケ製品採用年、使用終了年を記した。